組織や集団内における対人嫌悪

東京理科大学理学部 非常勤講師
金山富貴子（かなやま　ふきこ）

Profile—金山富貴子
筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科（心理学専攻）単位取得退学。心理学修士，教育学修士。立正大学心理学部専任助教を経て，2013年より学校教育現場の直接支援のためスクールカウンセラーとして従事しながら現職。他に複数の大学にて非常勤講師を兼任。専門は社会心理学，感情心理学，教育心理学など。著書は『人事のための心理アセスメント』（分担執筆，日本文化科学社）など。

多くの人は社会生活を送る中で，学校や会社などの社会的な組織や集団に所属している。自分の所属している組織や集団の人々との社会的関係において，多くの人は否定的な関係をつくることを望んでいないであろう。しかし実際には，自分の所属する組織や集団内において他者を嫌いになることもある。

人がある特定の他者を嫌いになるという対人嫌悪事態について，嫌う側を「嫌悪者」，嫌われる側を「嫌悪対象者」と呼び（金山，2002他），対人嫌悪に関する研究の一部を紹介する。

嫌いな人に対して持つ感情とは

嫌悪は人の持つ基本感情のうちの一つである。この基本感情である嫌悪は，拒否機能を持ち，人にとって物理的にあるいは心理的に有害な対象物を除去するという重大な適応機能を持っている（Izard, 1991など）。

嫌悪の感情は，その強さの程度によってDisgust（嫌悪），Aversion（忌避），Dislilke（嫌い）などがある（Plutchik, 1980）。Disgust（嫌悪）は，芳しくない人との接触や，規範的な基準から逸脱した他者の行為や普通の人がもつ社会的動機に欠けるような他者の不道徳な行為によって引き起こされ，むかつきを生じさせる感情である。Aversion（忌避）は，身体的な苦痛を引き起こすものや，精神的な苦痛や葛藤を引き起こす刺激などにさらされた場合に生じ，不快感を生じさせる感情である。Dislike（嫌い）は，他者によって望ましくない状況がもたらされた場合に，その状況で自分が優位に立てる力がないと思った時に感じられる感情である。いずれにしても，嫌悪者自身にとって好ましくない避けるべき対象に対して感じられる感情であるといえよう。

嫌いな人に対して感じる嫌悪感情は，日常会話の中などでは，キライ，イヤ，ムカツク，好きじゃないなどの表現が用いられる傾向にあるが，実際にはどのような感情なのだろうか。

日常場面を考えると，自分の所属している組織や集団内の人を嫌いになった場合，その嫌いな人と自分との間には上下などの立場関係が存在する。対人感情の研究では，自分よりも劣位の立場の人物には怒りや軽蔑を感じ，自分よりも優位の立場の人物には恐怖や劣等感を感じる傾向のあることが示されている（齊藤，1990）。

そこで，組織や集団内で実際に嫌いな嫌悪対象者に対して嫌悪者が持つ感情について検討してみた（金山・山本，2003）。すると，拒否感情と非好意感情がやはり比較的強く感じられていたが，それ以外にも，自分より劣位の立場の人物に持つ憎悪感情と憐憫感情，そして自分よりも優位の立場にいる人物に持つ恐怖とが，少し感じられていた。このうち，嫌悪者が嫌悪対象者を嫌いである度合いが強くなるほど強くなっていたのは拒否感情と非好意感情，憎悪感情と憐憫感情の4つの感情であった。このことから，嫌悪者は嫌悪対象者に対しては，基本的に非好意と拒否の感情を感じるが，嫌悪対象者を嫌いであるほど憎悪や憐憫の感情も感じることが示された。

しかしながら，この研究では嫌悪対象者との立場関係によって異なる感情が生じることは見出されなかった。それは立場関係として先輩，同輩，後輩などの形式的な項目を用いたためか

もしれない。例えば先輩を嫌いな場合，先輩を尊敬できず，自分よりも下位だと見なすことが考えられる。そのため，形式的な立場ではなく，質的な指標を用いる必要があるのかもしれない。また，その人を嫌いになった原因によって生じる感情が異なることも考えられる。

どのような人を嫌いになるのか

人がどのような他者を嫌いになるのかについては，これまで主に社会心理学の対人魅力の分野で検討されてきた。対人魅力の研究では，嫌悪は好悪という形で間接的に扱われてきたが，嫌悪の知見をいくつか得ることができる。

まず，性格特性を扱った研究では，一般的に人から嫌われやすいと推測される性格特性として，不潔，信頼できない，思いやりがないなどが示されている（豊田，1999など）。また，行動や態度を扱った研究では，自分のことを嫌いな相手を嫌いになること（Berscheid & Walster, 1969），自分を否定的に評価する相手を嫌いになること（Aronson & Linder, 1965），時期尚早な深い自己開示は嫌われること（Kaplan et al., 1974），自分と態度の類似していない相手ほど好かれないこと（Byrne & Nelson, 1965），などが示されている。

これらの研究は，未知あるいは架空の人物や一般的な他者に対する好悪を扱ったものがほとんどであり，日常の中で実際に生じた対人嫌悪には焦点があてられていない。そこで，実際の嫌悪対象者の嫌悪原因に着目して検討した（金山，2002）。大学生に調査を行い，同じ組織や集団の中に実在する嫌悪対象者を1名想起してもらい，その嫌悪原因について回答を求めた。その結果，10種類の対人嫌悪原因が見出された（表1）。

同様の研究は，他の研究者も行っている。斎藤（2003）は，嫌悪対象者の特徴に着目して分析しており，得られた結果のうち，自分との相違，相手の傲慢さ，相手の自己中心性，相手の主張過剰，相手の外見，相手の話し方の6つの特徴は，筆者が見出した嫌悪原因と共通する部分も多い。嫌悪原因や嫌悪対象者の特徴を検討することは，何に気をつければ嫌われないかの手がかりを得ることにつながり，円滑な対人関係をつくるための手がかりの一つになりうると筆者は考えている。国内での研究はまだそれほど多くはないため，研究知見の蓄積が待たれる。

表1　対人嫌悪原因（金山，2002を改変）

因子名	項目例
横暴な言動	人に対して直接，傷つくような悪口や嫌味をずけずけ無神経に言う。
マナーの欠如	人から何かしてもらってもお礼や感謝の気持ちがない。
尊大な言動	知ったかぶりや優秀ぶっている。
計算高い自己演出	自分よりも立場が上の人に，やたらと良い態度で振る舞う。
内向的な雰囲気	自分から人に話しかけず，皆となじもうという姿勢がない。
不愉快な言動	年のわりに言動や考えが幼稚。
互いの相違	何か一緒に行動する時，あなたとしたいことが合わない。
私への否定的態度	あなたのことを嫌っていると感じられるような態度をとる。
非魅力的外見	服装の趣味が合わない。
ずうずうしさ	自分で出来ることでもすぐ頼ったり，都合が悪くなると頼ってくる。

嫌いな他者にどのような行動をとるのか

嫌いな他者に対しては，一般的に拒否や回避の欲求や行動が生じる傾向がある（齊藤，1990）。しかし，その嫌いな他者が自分と同じ組織や集団に所属しており，日常的に接する人である場合はどうであろう。たとえ嫌いであったとしても，日常的に接する中でその人とのやりとりを避けることができず，拒否や回避の行動をとれないこともあるのではないだろうか。

筆者らの調査研究によると，嫌悪対象者に対してとる行動として，次の7種類の対処行動が見出された（金山・山本，2005）。それらは，嫌いな人物に合わせたり良く思われるよう振る舞う「取り入り」，周囲の人に相談したり原因を考えたりしながら嫌いな人物との関係を悪化させない方法を模索する「穏便解決」，嫌いな人物に改善を求めるよう働きかける「積極解決」，嫌いな人物の嫌な部分にこだわらないで他の人と同じように接したり表面上愛想良く接する「わりきり」，目を合わせたり近づいたり

しないようにする「接触回避」，周囲の人に陰口を言う「陰口」，嫌いな人物の嫌がることをする「意地悪」であった。

この中で比較的多く行われていたのは，わりきりと接触回避であった。わりきりは嫌悪度の強さとは関係なく全般的にとられやすい行動であったのに対し，接触回避は嫌悪度が強くなるほど行われる行動であった。また，わりきりと接触回避は，嫌悪対象者との上下関係による違いも見られなかった。上下関係による違いが示されていたのは陰口であり，嫌悪対象者が自分より上の立場であると同等や下の立場であるよりも陰口を多く行っており，また，陰口は嫌悪度が強くなるほど行われていた。

このことから，拒否や回避以外にも，わりきりや陰口などの対処行動をとることが示された。わりきりや陰口は，どちらかというと建設的な解決行動とは言えないが，現状を少しでも乗り切ろうとする行動であるように筆者には思える。嫌いな人には，基本的には嫌悪者からは接触しないようにするが，接触を避けられない場合もあり，その場合に嫌悪をあらわすのは周囲の雰囲気を悪くするであろうから，極力控えて表面には出さないように接するのであろう。しかし，その人が自分よりも上の立場の人物である場合は，その人の陰口を周囲に言うことで心のガス抜きをしているのではないだろうか。陰口は一般的には望ましくない行為だが，嫌いな人と関わる上で苦しさを溜め込まないために必要な行為なのかもしれない。

また，この研究以外に，嫌いな他者に対してとる対処行動が嫌悪対象者の特徴とどのように関連しているかを示す研究もある。河野ら（2015）の研究によると，嫌悪者と相違する相手，傲慢な相手，自己中心的な相手，主張過剰な相手に対してはいずれも回避行動をとることが示されているが，外見や話し方が嫌な相手に対しては拒否や回避の行動だけでなく受容もしないという結果が得られており，興味深い。

嫌いな他者を嫌っているけれど，自分は……？

先ほど，対人嫌悪の原因を紹介したが（表1），その嫌悪原因の内容を見てみると，一見して非常にネガティヴな言動であるように思える。しかし，これらの言動は特別非常識な限られた人だけがとる言動なのではなく，日常の中で誰もが実はついとってしまっている言動である可能性はないだろうか。例えば，人を傷つけるような言動を，気づかないうちに嫌悪者自身も自身の所属する組織や集団の成員の誰かに対して行っているかもしれない。つまり，嫌悪者は何らかの嫌悪原因によって嫌悪対象者を嫌いになっているが，その一方で，嫌悪者自身も誰かから嫌われるような言動をとっており，嫌悪者もまた誰かの嫌悪対象者となっているのかもしれない。

そこで，どのような言動の他者を嫌悪しやすいか（他者への嫌悪傾向）と，自分が他者から嫌われるような言動をどの程度行っているか（自己の嫌悪的言動傾向）について，大学生を対象に調べてみた（金山，2010）。嫌悪原因10種類の言動を66項目挙げて，回答者自身がそれぞれの言動を日常の中でどの程度行っているかを尋ねた（自己の嫌悪的言動傾向）。なお，同じ66項目について，自分の所属している組織や集団の中にそれらの行動をとる人がいたらどのくらい嫌かも尋ねた（他者への嫌悪傾向）。なお，この66項目が嫌悪原因の項目であることは回答者には知らされていなかった。

その結果，自己の嫌悪的言動傾向の平均値はどれも著しく低かった。つまり，回答者自身は嫌悪原因10種類の言動のいずれも自分はそのような言動を普段行っていないと回答していたことが示された。しかしながら，それは嫌悪原因の66項目がネガティヴな内容の項目だったため，たとえ自分が実際にそのようなネガティヴな言動を誰かに対して普段とっていたとしても，それを自分で認めずに社会的に望ましい方向へ意識的あるいは無意識的に回答したのかもしれない。そのため，第三者評定も併用して今後検討する必要があるだろう。

また，他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向との相関を見てみると，「横暴な言動」と「計算高い自己演出」の2つの嫌悪原因におい

て有意な弱い負の相関が示された。しかし，それ以外においては負の相関が示されてはいたものの，相関係数が低く，有意ではなかった。対人魅力研究では態度や属性などの様々な側面で類似性効果（似ている相手ほど好きになる）が見られることが知られているため，もし対人嫌悪が類似性効果の逆（非類似性効果）であるならば，自分と違っていて似ていない相手ほど嫌いになるという結果が得られるであろう。今回の結果からは，「横暴な言動」と「計算高い自己演出」の2つの嫌悪原因については非類似性効果で説明できる可能性が示唆され，興味深い。しかしながら先述の通り，回答者が自己の嫌悪的言動傾向を低く回答しただけの可能性もあるため，さらに研究を重ねる必要があるだろう。

おわりに ── 対人嫌悪とつきあっていく

嫌悪は拒否機能を持つ感情である。そのため，日常の対人関係の中で関わる必要のある人物を嫌いになると，その人物との関わりを避けられず，ストレスフルな状況に置かれたり，組織や集団に悪影響の及ぶ可能性も考えられる。

それでは，嫌悪は悪い感情なのかというと，筆者はそうは思ってはいない。嫌悪は様々なことを教えてくれるからである。

まず，自分がどのような人物に嫌悪を感じるのかを知ることによって，自分が何を大切にしているのか，自分が現段階でつきあえる人の範囲など，自分のことについてより深く気づく機会を得ることができるだろう。嫌悪感情がなければ，嫌いであることがわからず，それらを考える機会も得られないかもしれない。

また，他の人がどのような人物に嫌悪感情をもつのかを知ることによって，何に気をつければ嫌われないのかという社会的スキルの手がかりを得ることができる。それは，円滑な対人関係を築き，その関係を崩壊させないための手がかりの一つともなるだろう。

嫌悪は不快感や胃がむかつくような感じを生じさせるため，そのような感情は無くなってほしいと思う人もいるかもしれない。しかし，進化論的な観点から見ると，基本感情の一つである嫌悪は，適応上必要なシステムとして危機を回避したり克服したりするために備わっている重要な感情である。したがって，その嫌悪感情を適切に感じ，それとつきあっていくことが大切であろう。対人嫌悪を研究する中で，嫌悪感情とのより良いつきあい方を探っていきたい。

文　献

Aronson, E. & Linder, D.（1965）Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology, 1*, 156-171.

Berscheid, E. & Walster, E.（1969）*Interpersonal attraction*. Addison-Wesley.

Byrne, D. & Nelson, D.（1965）Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology, 1*, 659-663.

Izard, C. E.（1991）*The psychology of emotions*. New York: Plenum Press.［イザード・C. E.／荘厳瞬哉（監訳）（1996）『感情心理学』ナカニシヤ出版］

金山富貴子（2002）対人嫌悪原因の構造．『日本心理学会第66回大会発表論文集』140.

金山富貴子・山本眞理子（2003）嫌悪対象者に対する感情の構造．『筑波大学心理学研究』*26*, 121-131.

金山富貴子・山本眞理子（2005）所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動．『筑波大学心理学研究』*30*, 13-24.

金山富貴子（2010）他者への嫌悪傾向と自己の嫌悪的言動傾向との関連．『立正大学心理学研究所紀要』*8*, 77-87.

Kaplan, K. J., Firestone, I. J., Degnore, R. & Morre, M.（1974）Gradients of attraction as a function of disclosure probe intimacy and setting formality: On distinguishing attitude oscillation from attitude change, study one. *Journal of Personality and Social Psychology, 30*, 638-646.

河野和明・羽成隆司・伊藤君男（2015）対人嫌悪の理由と対処の関係：被嫌悪回避傾向を考慮して．『東海学園大学研究紀要』*20*, 127-137.

Plutchik, R.（1980）*Emotion: A psychoevolutionary synthesis*. New York: Harper & Row.

斎藤明子（2003）対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究．『九州大学心理学研究』*4*, 187-194.

齊藤勇（1990）『対人感情の心理学』誠信書房

豊田弘司（1999）大学生における嫌われる特徴の分析．『奈良教育大学教育研究所紀要』*35*, 71-75.